

語り合う文学教育

2011 年度・第 6 号 9 月 5 日

ついに 100 名突破！

会員 105 名に！！

語り合う文学教育の会が生まれてから 10 年がたとうとしています。何とか 3 桁の会員をと願ってきましたが、みなさんの力でついに実現しました。

会員でなくても月例会には来ていただけるし、会誌ももちろん読めます。ホームページをつくったのでいろんな研究論文も見てもらえます。営利団体ではないのもうけは要りません。

でも、安定的に、例会案内を郵送し、会誌を発刊し、夏春の研究大会を運営していくためには、年 2000 円の会費を払ってくださる方が 100 名、つまり年間 20 万円が最低必要なのです。今年度は特に次回の 10 号記念号の編集発行を予定しているので、1 人でも多くの方が加わってくれることを望んでいました。ありがとうございます。

語り合う文学教育の会は、本当は研究団体すべてがそうあるべきだと思いますが、会員はみんな対等平等です。会員一人ひとりが、自分の目で子どもたちを見て、自分の頭で教材と授業を考える**自立した実践者**として成長していくことが願いです。でも、それは、すぐれた実践や高い理論に学ぶことと矛盾しません。これからも、例会や会報で交流していきましょう。

さて、105 名の会員の方に 3 つお願いがあります。

- ①**継続して会員でいてください。**会員は 1 年更新なので、来年の 4 月にはまた 0 から出発です。その頃に振込用紙をお送りしますから、忘れないで会費を納めてくださいね。
- ②**なかまを広げましょう。**授業によって子どもたちの中に作品が生まれ、生まれた作品は子どもたちに働きかけます。そこに何が起きているのか、耳を澄ませ聴き取る、目を見開いて見抜く、それがわたしたちの授業です。文科省や教育委員会おススメの授業

とはちょっと違いますが、子どもたちが生きいきと活躍するすがたを見てください。一人でも多くの方がこの会を知ることは、地域の教育を、大風呂敷を広げれば日本の教育を、実践から変えていくことにつながります。なかまをどんどん広げましょう。

③現在、三重と奈良で月例会を開いています。会員は山形から沖縄まで日本各地におられます。多くの方は月例会には出てもらえません。そこで、ぜひ**近況や地域の様子、子どもたちと授業のことを**知らせてください。実践もお寄せ下さい。会報やホームページで紹介します。紙媒体でも、メール添付でもかまいません。

会員の内訳は、三重県46名、奈良県28名、全国31名です。

◆夏のとりくみ◆

この夏も、語り合う文学教育の会は各地で活躍しました。

◇8月6日～7日 日本文学協会国語教育部会夏期研究集会（東京）◇

去年尾鷲に来ていただいた田中実さんが基調報告をされました。尾鷲で話していただいた時には、難解だ、わけが分からない、という感想を持たれた方もありましたが、今回は本当にていねいに原点から話されました。最後にこう言われました。

教室は文学の可能性を促す〈自己教育〉の場、ここから読みの実践に即した方法論が拓きます。方法論の入り口のドアを開けましょう。

今、わたしたちも、授業の原則を考えようとしています。授業実践で試されない限り文学教育の理論は発展しません。期せずして同じ問題意識に立っていることを感じました。この報告の内容は、『日本文学』12月号に掲載の予定と聞いています。

小学校分科会では、わたし（橋本）が「おにたのぼうし」について話しました。いつか聞いてください。草分さんは「大造じいさんとガン」の実践報告をされました。小学校分科会は盛会でした。

「〈文脈〉を掘り起こす」をテーマにしたシンポジウムでは、藤原和好先生が「子どもの文脈を読む、子どもの文脈から読む」として、「おおきなかぶ」「お手紙」「ずうっと、ずっと、大すきだよ」の作品の読みの新たな可能性を示されました。あらためていつかゆっくりお聞きしましょう。

◇8月20日～21日 語り合う文学教育の会夏期合宿研究会（松阪）◇

20日は入澤さんの「緑の馬」の実践報告に19名、21日も、庄司さんの「白いぼうし」の報告に19名。入れ替わりがあったので参加実人数は25名です。会員以外の方も3名参加されました。日本で一番暑い多治見から、今年も大西先生が来てくださいました。

機関誌『語り合う文学教育』10号の編集についても話し合いました。この件についてはみなさんのご意見をお聞きする場も設けます。

◇8月27日～28日 近畿東海教育研究サークル合同集会（奈良）◇

京都の審良さんが、新しい教科書について問題提起をされました。「かいがら」という東京書籍1年上の教科書にある森山京の物語について、原作との違いから何が見えてくるか、鋭くおもしろい提起でした。

また、鈴木啓史さんが「いじめっ子が二人」の実践報告をしました。

国語の分科会は35名の参加がありました。

◎ あまんきみこさんのお話 ◎

童話の中の人物が、童話から抜け出して童話を書き始めた、と師であった与田準一さんが評されたとおりの方です。もう80歳をこえられたと思いますが、いつお聞きしても若々しい印象の方です。

◆ご自身のことなど◆

小さいときから体が弱く、のろまで、臆病でした。大きくなったら何になるかと問われると、お友だちは、男の子はみんな兵隊さん、女の子は看護婦さん（従軍看護婦）、と答える時代でした。でも、わたしはとてもだめだと思いました。看護婦になったら、兵隊さんの治療をしなくっちゃいけない、大けがをして血を流している兵隊さんの治療なんてとてもできないと、実際には、そんな場面に出くわしたこともないのに思っていました。それで、「幼稚園の先生になりたい」と、小さい声でしょぼしょぼ言っていました。

何年か前に昔話の復刻本が出て、それを開いた時に、わたしが19の時に亡くなった母の読み聞かせてくれた声が、後ろから聞こえてきました。それとともに、母の息がわたしの耳にあたりました。抱っこして読んでくれていたんです。読んでもらった体験は

長く残ります。

学校でも、先生が本を読んでもくださる時間は幸せでした。お勉強をしなくてすんだからかもしれません。先生が読んでくれそうだと、ご機嫌をそこねないようにいい姿勢をしたものです。そんな時代だったのに、戦記ものではなく、路傍の石、次郎物語、風の中の子供、といった作品を読んでいたように思います。

文章を書くのは好きでした。学芸会の劇に出るのは嫌だったけど、劇をつくるのは好きでした。女学校の頃は、童話をつくってお友だちと交換しました。

大連で敗戦を迎えた時、ロシア兵が入って来ないように家を釘づけにして、外に出られなかったのです。怖かったけれど、実際怖いこともありました。本はたくさん読みました。ほかには絵を描くことしかすることがなかったのです。みんな読んだので、それまで読んじゃいけないと言われていた謡曲の本を手に取りました。内容は亡霊が出てきたり怨念があったりで、子どもには分からないし、和綴じの本だからしわくちゃにされたら困ると大人たちは思っていたのでしょうね。

読んでいいと言われたので、読みました。やっぱりわからなかったけれど、読みがながふってあったので、声に出すことはできました。声に出すと、だんだんわかってきました。おもしろかったですよ。それまで禁止されていたせいもあるのでしょうか。

母は病弱で、わたしが一人娘でしたから、早く嫁にやりたかったんですね。19の時、婚約がととのった晩に母は亡くなりました。それからは、結婚生活、子育てで一生懸命でした。

下の子が幼稚園に入った時、ちょっと手が離れたので、大学でもう一度勉強したいと思いました。主人は転勤の多い仕事で、その時はちょうど東京にいました、またちょうど通信教育と聴講とをあわせてできる仕組みがありました。日本女子大学家政学部児童学科に入りましたが、作家になろうと考えてではなく、目の前の子育てに生かしたかったのです。

ところが、児童学概論の講義で出したレポートを見て下さった先生が、与田準一先生に紹介状を書いてくださいました。封書ですから、中に何と書いてあったのか知りません。それで、先生の『びわの実学校』に童話を書くようになりました。ふりかえってみれば、児童文学作家の道を選んだというより、たくさんの出会いの中でなんとなくこうなった、ということです。

人生は年輪のようだと思います。年輪は消えません。捨てたいと思ったできごとも、それを捨てたいと思ったことも、全部が今のわたしの年輪です。その今のわたしが、作品を書くのですが、自然ににじみ出るようにして作品が生まれます。

◆作品のことなど◆

○「ちいちゃんのかげおくり」

子どもの頃、かげを空に送ってよく遊びました。その頃のお友だちの中には、そんなことしたあとと言う人もいるのですが、わたしはよく覚えています。一人でやっている、こうやって空に行けるような気がしました。また、みんなでやる時は、わたしはのろまだったので、ひよっとしたらわたしのかげだけが遅れて空に行くんじゃないかなんて思ったりしました。それで、そろって同時に行くと、そのことがうれしかったのです。

その頃は、かげを送ろう、かげを映そう、と言っていました。何年かこのことを書くかと思っているうちに、「かげおくり」という言葉が、向こうからやってきて題名になりました。

この話は、本当は3代の話でした、構想では、です。名前まで決めてありました。おばあさんはなみ子さん、お母さんがちいちゃん、ちいちゃんは結婚してせん子ちゃんを生むはずだったのに、書いても書いてもちいちゃんは死んでしまいました。1年封印しておいて書いても、同じでした。子どもの死は未来を奪います。せん子ちゃんは生まれてきませんでした。

○「おにたのぼうし」

鬼は鬼に生まれたかったのかしら。

悲しいことに出会うと、「生まれる」ことは選べないのだと思います。わたしが子どもの頃、野犬捕獲車というのがあって、つかまえてどこかへ運んで行きました。うちにも犬がいました。つかまえられた犬の遠吠えが聞こえてくると、うちの犬も遠くへ吠えました。あの犬はあの犬に生まれてきたかったのだろうか、子どもの頃はそれが怖かったのです。

捨て猫を見ると、あの猫はあの猫に生まれたかったのかしらと思います。

節分の夜においだされた鬼はどこへ行くの、そう聞くと、母は、みんな海岸に集まっておいおい泣いてオニオコゼになるんだ、と言いました。どうしてそんなことを言ったのでしょうか。そのこともわたしは怖かった。

おにたは生まれた時から鬼で、角をかくさないと生きていけない、そんな鬼に生まれたかったのかしら。

○「白いぼうし」

帽子は、昔は男の子の大切な遊び道具です。チョウやトンボをつかまえたり、宝物を入れたりします。すぐ汚れます。だから、お母さんはいつも帽子を洗っていました。何度も何度も洗うから、名前は赤い糸で縫いとおかないと消えてしまいます。帽子は、きれいに洗った白です。

松井さんは、お母さんから夏ミカンを送ってもらいました。たけおくんはお母さんに

赤い糸で名前を縫いとりしてもらった白い帽子をかぶっています。

○「きつねのおきゃくさま」

ことばの力は大きいものだと思います。子どもの頃、先生に言われたことばをかき抱いていたりします。このきつねもそうです。

ふつう、作品は、わたしの身から離れる、という感覚で仕上がります。ところが、この「きつねのおきゃくさま」は、なかなかわたしの身から離れなかった。ある日、不意に「むかしむかし、あったとき」ということばが向こうからやってきました。それと同時に「とっぴんぱらりのふう」ということばも出てきました。その時は、何のことか分からなかったのです。あとで、東北の昔話の語りおさめだということを知りました。前にどこかで聞いたことがあったのでしょうか。意識の下にあったのだけれど、そのことばがうかびあがってきた時に、「きつねのおきゃくさま」が、わたしの身から離れたのです。

◆若い先生たちに◆

戦争は、起こってしまったらもうだめです。お互いがそれぞれ正しいと思ってしまっているんだから、相手を倒すまでやめられない。戦争は起こさないことが何よりです。

若い人たちは、戦争を知らないと言うけれど、本当にそうでしょうか。世界中どこかで今でも戦争はあります。戦争のなかった時はありません。戦争を知らないのか、見ないだけなのか。昔は、見ざる聞かざる言わざるが処世訓でしたが、それではいけないと思います。テレビに映った戦場の子どもは今どうしているのか、ほんのひとしづくでいいから考えてほしい。しっかり見て、聞いて、話して、知ってほしい。戦争を知らないと言っていることが、本当に幸せなことなのか考えてほしい。

学校では、先生の声に出して、本を読んでやってください。

本当の星を月を風を感じて生きて行ってほしい、子どもたちも。

かなりわたし（橋本）の主観的な聞きとりですが、このような話をしてくださいました。お話の順序は編集しています。

聞いていて、わたしは不意に福島原発事故を思いました。

奈良で仕事をしていた頃、福井の原発立地に反対するとりくみに加えてもらっていました。その頃に、原子力発電というのは、原子力潜水艦の動力源を陸にあげただけだと

ということも教えてもらいました。過去の歴史には、想定を超えた大地震があったことも知っていました。

しかし、今、正直にふりかえると、やはりそうは言っても日本の科学技術は安全を保障しているとどこかで思っていました。錯覚がありました。安全神話は、決して権力と電力会社だけが作りだしたものではなかったと思います。見て聞いて話しても、本当のことにたどりつくのは難しいと改めて肝に銘じました。

☆これからの予定☆

★9月17日（土）奈良例会

- ・ 午後2時半～5時 奈良教育大学附属小学校
- ・ 物語の授業の組み立てを考える

子どもたちの言語活動の充実をテーマにした校内研修会に行きました。実際にやられていたのは、ひたすら暗唱をさせるための教材集づくり（じゅげむ・宮澤賢治作品の一部・文語詩など）と「話し方・聞き方」の徹底指導でした。背筋をしっかりと伸ばして、相手を見て、速さ・強弱・間・抑揚に気をつけて、「わたしは～だと思ひます。わけは～だからです。」という話型で話すのが、中学年の到達目標だそうです。聞く方は、手を膝の上において、話し手の方を向いて、うなずきながら最後まで聞くのが目当てです。

授業づくりでは、過渡的にこういう指導が必要なこともあるでしょうが、これが理想の授業として強力に求められ続けると、子どもたちはどうなるでしょう。また、これが実現した授業風景を想像してみてください。30人の子どもたちが、誰ひとり後ろや横を見ず、手を膝の上において、話し手を注視している、仮に後ろの方の子が発言すれば、みんな後ろを振り返るわけですが、30人の中で話しているのは常に一人、発言が重なることはありません、誰もが「わたしは～だと思ひます。わけは、」と話し始める、それをみんな一様にうなずいて聞く。わたしには恐ろしい風景に思えます。

その上、肝心の問いはというと、「この時、この人はどう思ったでしょう」という心情主義そのものでした。

2学期にする予定の教材で、授業について原点から考えましょう。

- ★10月 8日（土）三重例会
- ★10月22日（土）奈良例会（予定）
- ☆11月 3日（木・文化の日）三重民教連集会
- ★11月12日（土）三重例会
- ☆11月19日（土）奈良教育大学附属小学校研究会

◇語り合う文学教育の会会報◇ 文責＝橋本博孝

連絡先 514-8507 津市栗真町屋町 1577 三重大学教育学部

国語科教育研究室（橋本博孝）

メールアドレス hiro3614@edu.mie-u.ac.jp

電話 059-231-9210